

## 緒 言

支那問題に對して、日本式常識に由て判斷せられた理窟が、日本人側に成る程と首肯されても、それが事實を裏切つて居る場合が鮮くない。今日我邦人中には、自稱支那通が甚だ多いけれども、支那に對する見方が區々である爲に、支那問題に對する着眼を誤つて居る場合が多い様である。

「日本人は支那人を知らない」とか、「支那は事實國を成して居ない」とか、云ふ様なことが、往々支那人の口から漏らされることがある。そしてそれは無意識に我日本の對支外交に關する根本的

錯誤の原因を指摘して居るものとも思へる。又「支那は不可解なり」とか「支那人のやることは判らぬ」とか云ふ様なことが、依然として内外人間に繰返へされつゝあることに由て見ても、今尙ほ世界一般的には支那及支那人なるものが、疑問の種となつて居ること丈は明瞭である。

支那の將來を明確に豫斷することが出来ないとしても、其内容が如何なるものであるかを豫め能く検討し、以て支那問題の爲に不測の災厄を被らざる用意を肝要とする。蓋し對支外交は獨り支那人のみを相手とするものではなく、支那人の袖に隠れたる幾多の相手方が居るからである。

仍て凡有支那問題解決の基礎的知識たるべき支那官民の性情に就ては、我官民要路者一般が之を知悉すると共に、成し得れば廣く世界列強の識者へも、之を紹介諒得せしむべきである。斯かる見地から甚だ鳥滸がましくはあるが、本稿を草して以て我邦人の參考に資せんとするものである。

東京築地高乃家旅館にて

昭和六年一月

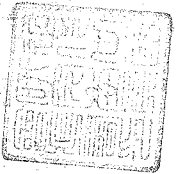
村田熊三

## 支那官民の性情 目次

一、概 説	1
二、支那官員政客の性能及特徴	11
三、革命支那の正體	25
四、排日の真相	34
五、滿蒙へ邦人の發展せざる事情	41
六、滿蒙鐵道問題	47
七、在滿鮮人問題	61
八、支那人の詭辯欺滿振と之に對する日本人の 率直振其他支那官民の性情に關する雜感	71
九、結 論	110

# 支那官民の性情

村田熊三



## 一 概 説

財界の不況は一時的の現象であつて、早晩回復の時節到来するものとしても、不景氣や失業が屢々繰返へされる間に、漸次我國民思想の悪化することは、甚だ憂慮に耐へないものがある。蓋し不景氣は回復しても、一旦悪化したる思想の改善は容易でないからである。

物資の貧弱な上に人の數が著しく殖へて行く我日本の國情に於て、政府が如何に財政の遺繰や産業の奨励を施して見た所で、對外的に延びる方途を講じない以上到底それか追付くものでない。對內的の遺繰は一時的には景氣の挽回や多少の國富増進に資するに足るものもあらうけれども、是に由て五十年百年以

後の安定を期する譯には行かない、早晚行詰るものと見るが至當である。

斯く觀念する場合に於て、對外的に延びることが我國難自救方策の基調とも謂ひ得られる、そして外に延びる方面活路は諸種の關係事情や條件に於て、滿蒙大陸を措いて他に適當なる地域はないのである。然るに從來我官民の之に關する所見や方針なるものが、區々にして歸一する所を知らず、對策も亦確立せず其日暮らしの場當り主義で推移して居る、從て滿蒙に關する交渉も事業も共に失敗を重ね既得の利權さへ漸次其影の薄くなりつゝある状態である、仍て今後晩播ながらも反省自覺して、對策を講じなければ、既往の失敗を繰返へすのみならず、南滿の動脈を形成する滿鐵と雖も、今後は甚だ樂觀を許さない情勢に在るから、支那側の滿鐵併行線と相待て後日になればなる程列強との關係が複雑となり、滿蒙に關する日支條約なるものも遂に有名無實なものとなつて滿蒙は愚か我滿鐵附屬地の經營さへ困難となり、我日本は眞に八方塞がりの窮地に陥ること杞憂とせず、而して今尙對支輿論の不統一や對滿政策の確立を見ざ

ることや、或は從來の我對支交渉や滿蒙の事業に於ける失敗の原因を検討して見るならば、結局我朝野を通じて支那の實情殊に支那官民の性情に疎いと謂ふ結論に到達するのである。

抑々現代の支那人なるものは、我國民の大部分が想察して居る様な單純なものではない、即ち支那人を愚物視することは勿論誤解であるが、彼等を優秀なる民族の未成品として其將來に期待を懷くことも亦大なる錯誤である、そして支那人を愚物視する我邦人の多くは教育不十分のものであつて、支那人を買被り居れる邦人の多くは智識階級者中に在る、即ち前者は我國民教育の至らない罪であり、後者の多くは歐米の思想や智識に黴れた結果に外ならぬ、或る日本の學者が支那民族に對する優越觀を放棄せよと邦人に教ゆるものがある、恐らくそれは前者を戒飭するものであらう、吾人も亦今日の支那人を單純未開な野蠻人とは思はぬが、それかと謂つて彼等支那人を文明國民同等若くは文明國民の後繼者扱にする氣には到底なれぬのである、何んとなれば今日の支那人は公

私の別なく利己的打算の觀念が頗る強盛であつて、飽く迄も自己中心主義であり、且つ餘りに奸智に長して居る爲に、國家統治とか國際信義の尊重杯云ふ方面は著しく其性能に缺けて居るからである、そして是等の特徴は支那人が單に個人として働く場合に支障ないとしても、公人として仕事する場合には甚だしい障碍となり他に迷惑を及ぼす場合が頗る多い、之を換言すると支那人は公人としての場合に於ても極端な利己主義で行くから、公人としては仕事するに適しないものである、殊に支那の官員なるものの唱ふる産業開發とか住民の福祉増進杯云ふ様な事柄は只其表看板に過ぎないものであつて、彼等の言論や行動は總て住民の安寧幸福や利害休戚を基調とするものではない、斯かる敵本主義の狀態に置かれあるものに對して、普通の國と同様に交際し若くは啓蒙指導せんとして見た所で、其れが動くものでない、斯る議論を持出すと邦人の一半は之を否定するであらうけれども、吾人は決して支那人を誣ひるものでもなければ、又渠溝を設けるものでもない、二十年來の體驗を基調として終始一貫した

る主張である。

元來支那に在留する日本人の多くは支那の都會に居住して、支那の官員や政客の言論戦に眩惑されて居るものが鮮くないから、支那の真相が判らない、其れを知るには支那内地の田舎に亦往し、一般の地方住民と親しく交際して見れば支那官憲と住民との關係や、軍閥の利己抗争の真相杯が能く判るのである、蓋し支那の田舎は支那の裏面に相當するからである、隨て支那の都會にのみ十年も廿年も居住した日本人にして往々支那の實情に疎いものの居ると云ふ事も何等不思議はない、況んや我母國や歐米地方のみに暮らしたものが、支那の實情や支那人の性情が判る筈がない、その判らぬ人が對支外交をやるからいつも失敗するのである、そして先方の奥の手は排日であり又之が對日外交唯一の武器である、支那の排日に對する防禦の手段に就ては我當局が彼是と腐心するのは無理もないことではあるが、此排日なるものの原因に對する觀測が甚だ間違つて居る、例へば日本が支那に利權の要求をするからとか、支那人を馬鹿にす

るからとか、或は又武器や阿片の密輸をやるからとか云ふ様な事柄を以て、排日の主因と見做して居るものが相當多い、併かし乍ら是等の事柄は先方よりする排日の口實や多少の排目的助力にはならうけれ共、それか排日の原動力ではない、支那人の排日は彼等の性情を能く検討して見れば自から鮮明となる、之に關する説明は後説本論に譲ることとするも、要は彼等官民兩者の立場を能く理解すれば排日も親日もない、是等の事は畢竟先方の利己的な御都合主義から出發して居ることが判るのである、故に支那人の排日を彼等の國家的觀念若くは精神的團結の下に協力策動するものと見るのは當らないのである、支那の排日は殆んど官製であつて住民の輿論と見たら大なる錯誤である。

尙ほ邦人中には我日本が滿蒙に對する政治的野心を放棄すれば、邦人の經濟的進展の容易なるかの如く思惟するものも鮮くないが、是亦大なる謬見である、蓋し在滿支那一般の住民側は兎も角官職を利用して不淨蓄財の繩張を固守せんとする東四省の支那軍閥としては、滿蒙への日本の經濟的發展は聽て政治的侵

略となることを恐れ、極力邦人の經濟的發展を阻止せんとするからである、それも支那の軍閥官匪が自己の繩張を確保せんとする爲であつて一般住民の願望ではない、現に滿蒙に何等政治的野心を持たない幣原外交を以てしても、支那側は之を歓迎しないのみならず倍々増長して逆襲的態度を取つて居るではないか、従て今後邦人の對滿蒙經濟的發展は、普通の方便を以てしては却々容易ならざることを見記すべきである、又滿蒙に於ける我利權の獲得が排日の原因なりと誤信して之が放棄を主張する様な邦人も居るが、支那に對する我利權の放棄は、支那の軍閥若くは支那民族中極く一部僅少なる野心政客の私利私欲を満足せしむるに止まり、一般支那住民の爲にはならぬ、滿蒙奧地に居住した邦人は、支那の郵政が如何に亂雜で不確實なるものであるかを體驗して居る、中には鮮人宛の信書が時に支那配達夫に由て販賣されて居るし、特務機關より我軍部へ發送された秘密な報告や情報等が支那側から無斷で開封されたり沒收されたりして居る、是等の事件に對する我外交官の寛容無氣力な事もさることながら、奧

地に我郵便局があつたならばとの感を深ふるものである、又領事裁判の如き支那住民からも大に之を歓迎されて居る位であるから、之を撤廢すると云ふ事は彼我共に有害無益である、其他支那に於ける邦人經營の言論機關(漢字紙等)が如何に支那の發育指導上有要であるかは、苟も支那の實情に通ずる何人も能く之を了解して居る、故に順天時報の如く撤廢せしむる事は間違ひであつた、尙又從來在滿鮮人の保護に就ては之を支那官憲へ一任したるのみにして何等特種の講策が施されてない爲めに、問題の發生することは當然とも謂ひ得られる、仍て今後支那側が如何に詭辯を弄しても、南滿奧地駐在の我警官は之を撤廢せしむることなく寧ろ條約の不備を改め之が増加を計るべきである、關稅自主權にしても彼等軍閥官憲は、之れに由て關稅の增收を計り其の私腹を肥すの外、軍閥の弗箱たる新興資産階級の利得を増すのみにして一般住民としては有害無益である、軍閥の私腹を肥すことや其の系類資産階級を富裕ならしむることは總て支那國內の戰禍を益々促進し増大せしむるものである、支那政府の財政は

年々歲入不足勝であり、特に軍事費は歲出の四割五分に相當し之が捻出に困却しつつあるも、各省は中央對地方軍費不渡りの補填と稱して中央收入の抑留を實行して居る、其實之れに由て官員の私腹は肥やされるのである、殊に近年は鐵道收入も鹽稅も關稅の一部も地方に取抑へられ、中央政府の懐に入るものとは幾何もない始末である、如此國家財政の窮乏する反面に於て各省の軍閥や官吏の懐は肥るのである、斯かる状態は支那歷朝の恒例であり又固疾とも稱すべきものであつて、彼等が軍費を名として中央に送るべき金を送らざるのみか、軍事を名として凡有課稅や租稅の前取りを行ひ、更に其中より少なからざる部分を着腹すること毫も前清時代と異なる所なしである、故に關稅自主權の回復は彼等官員をして益々其固疾を挑發すると共に、之れとは反對の立場に置かれある支那一般住民の爲めには不利不幸を招來するものである、翻て之れを我對支貿易上より見るも甚だ不利不得策なる事勿論である、蓋し支那側としては國貨獎勵等の名に於て今後益々關稅の引上を計るものと見得べき事情があ



るからである。

如上の情況に於て、今後我已得の利權を逐次支那側へ返還する事は、我國としても又我國民としても甚だ迷惑なるのみならず、支那住民の爲めにも不利不得策である、故に假令之に關する條約が古からうと新らしからうと、之を手放してはならない、即ち支那への利權の返還は之を譬へて見ると軍閥と謂ふ放蕩息子へ借金を返してやる様なもので、此金を彼等に回収せしめて見ても彼等が之を自國住民の爲有要に利用し得るものではなく、却て放蕩援助の資金を殖してやる様なことになる、即ち軍閥の跋扈を助長するものであつて之が爲一般住民は倍々其迷惑を増すことになる、況んや我既得の權益は彼等に對する借金の様な性質のものではないから、斷じて先方の瞞着詭辯に載せられ又は他人に氣兼ね遠慮杯して之を返還したり、或は又泥田に遺棄すべきでなく十二分之を善用して母國の繁榮に資すると共に、年間苛斂誅求に悩みつゝある支那住民をも局部的に救濟するの實績を擧ぐべきである。

支那を一家に譬ふれば、其家族なるものは甚だ不統制無秩序なものであつて、我れ勝ちに無理遣り家長の椅子に割り込み、其家族を欺き勝手放題なる眞似を働き或は之を使傭しては近所隣の他家へも迷惑を懸ける有様にて、代が變れば單に表看板の塗り換へに由て家長としての信望を維持し擴張せんと努め、先代の對他的義務や約束の履行は眞に申譯的のものにて、根本的解決の誠意を缺ける爲め兎角之を無視せんとする傾向がある、仍て近隣者の彼等に對する指導方便としての寛容主義は、甚だ有害無益なりとする。

如上の觀察は既往二十年間、親しく支那官民との社交に務め又甚だ一地方的ながらも、上記後半十年間滿鐵の社業上直接交渉の任に膺れる自己の體驗と彼我國際交渉の實績を基調としたるものであつて、斯かる吾人の觀察や信念の過まらざることを、早晚實證し得る時代に到達することを確信し豫期するものである、乍併支那問題特に滿蒙問題解決の事は外國資本の魔手の之に延びざるに先立ち善處し置かざれば、噬臍の悔を後世に貽す事必然の情勢に在るので今之

を等閑に附する譯には行かない、而して滿蒙問題解決の難關は我身自體に存する即ち我國民が、支那事情特に支那人の性情に就き無智であつて、各人勝手な揣摩臆測を試み議論百出するも今尙輿論の見るべきものがない、従て邦人側の提案なるものも多種多様となり、我當局も亦之が撰擇捨捨に迷ひつゝある始末である、而して從來滿蒙問題解決に關する提案の多くは着手の處を示さず、單に難關突破以後の理想を考案し羅列したるに過ぎない、従て我當局を動かすにも足りないのであるから先づ我をして敵情を十二分諒解せしむることを其第一要件とする、即ち先方の事情が判れば適切なる難關突破の方便も立ち、又提案の採擇も容易となるのである、仍て甚だ不完全ながらも爰に支那問題中特に重要事件と思はるゝ事柄を擇むて之を解説し、以て支那官民の性情紹介に資すること下の通りである。

## 二 支那官員政客の性能及特徴

今支那と稱する國柄の内容を洞觀するならば、支那の爲政者なるものは自國

人民に對しては、法令規則や其他凡ゆる國事に籍口しては搾取を勵行して私財の増殖に努める、そして國民教育に於ては排外思想の養成に怠りなく、又一般住民には言論の自由を束縛して自國の秕政や内容の曝露するを豫防すると共に、之と同様の事情の下に外人の支那に關する調査や支那に對する善良なる施設や協力援助をも厭ひ、又外國との條約協定や或は彼我個人間の約束等に於ても彼等官員個人の立場として有形無形を問はず、苟も利己に値ひせざる場合には之を蹂躪せんとする傾向の著しいものがある、そして官員の殆んど總てが極端なる利己主義となつて居る爲に、又各其利己的立場を異にして居る爲に、上司の命令や訓令なるものも上下に徹底することか甚だ稀である、つまり命令や規則の實行が官員自己に有利とする場合には之か勵行に努むるも、更に自己に有利なる條件や事情の存する場合に在りては、命令規則の實行は單に形式的に了ることが通例となつて居る、従て支那では千百の不正防止の命令か出ても、結局其れが無駄に了るのである、如斯支那なる國は各局部の神經が聯關作用を爲さ

せねばならぬと云ふ口實を得せしめなければ解決の出来ない問題なのである。土地商租權の實施に關する細目協定の如き支那人としては何人も其相手方に爲ることを嫌ふから、條約成立後十數年を経過した今日尙ほ未解決の儘残つて居るのであつて、之を解決させるには相手方に花を持たせる様な名案を提供するか、然らざれば相手方の責任を解いてやつて此方が悪者になる外ないのである。支那人は賄賂を好むからと云ふて彼の面目を潰させる様な遣り方をしては駄目なのである。如何にも彼が賄賂を受納するのが當然である彼は止むなく受納しなくてはならない様な羽目になつたのであると、云ふ様な風に持ち掛けるのが上手なのである。之も責任回避性の一の應用である。

尙ほ支那の大小政權は何れも沙上の樓閣の如きもので、根強き基礎の上立つて居るものでないから何時倒れるか判らない。又各政權共、熱の不導體であるから其威令は部下にも徹底しない。故に彼等の聲明や誓言に全幅の信用を掛けて自衛の方法を講じないと云ふことは頗る危険である。

以上の外環境を利己に利用する事の巧みな事や、強者には至極從順にして弱者に暴威を逞ふする事や、増長性に富める事及び忘恩的傾向を有する事等は、支那一般官民の共通性にして是等の特徴は、次項以下各種の問題中に織込まれてあるから、此所には之を省略する。

### 三 革命支那の正體

支那の官員は如上の状態に於て人民に對しては、苛斂誅求を事とし言論の自由を封じ蓄財蓄妾や阿片の吸飲は依然として竭まず、一般住民殊に夥多の下層階級者に在りては國內産業の不振より生ずる勞力過剩の結果、彼等は其生命を維持する爲には如何に賃銀の低率なる仕事にも甘んじて之に従事せざるを得ざる窮境に陥り、然も斯かる状態は因習久しきに涉り此間特殊の教養を施さずして能く勤勞に耐へ得る風習を馴致し得た次第である。之に反して支那の中流階級以上の者は概して甚だ懶惰である。殊に官界に於ける支那人即ち公人としての支那人なるものは、概ね其地位の保全と不淨の蓄財に餘念なく其職務に忠誠

を盡すものは甚だ稀な状態である、尙又支那の學術工藝界に於ても陰忍努力して科學的又は技術的發明杯した陰德的功勞者が果して幾人あるか、斯かる國柄を稱して新興支那とか青年支那とか謂ふ人の心根が不可解である。

支那の家族制度が羅馬勃興前の状態に酷似して居ると云ふので今後の支那も羅馬の如き強大を致し得るものと見る人もあるが、不幸にして今日の支那人には羅馬勃興の初期に於て見たるが如き住民の神に對する信仰心（良心）が缺けて居る眞摯なる氣性に乏しい、今日支那人の神佛信仰なるものは概ね金儲の心願位なものが多い、御恩奉謝とか自己の身命を賭して邦家又は公衆團體の優勝安泰を禱る杯の祈願は甚だ稀れである、即ち今日の支那人には革命に肝腎な如上の要素が缺けて居る、従て近代支那の革命は偽物である新舊軍閥何れが勝を制しても大差はない、支那式の文明は夙に其の頂點を過り一般官民は共に奸智に長じ道義著しく頹廢しある點杯に於て寧ろ希臘羅馬の末路を辿りつゝあるではないか、然らば我日本の政治家如何と謂ふかも知れないけれども、日本の政

治家腐敗したりと雖も之を支那現在の公人に比すれば今尙多大なる距離間隔の嚴存することを實證し得るのである、仍て支那人は將來個人としては猶太人の如く經濟界に其民族的壽命を存續し得るとしても、國家を統治する公人としては早晚其消滅を免かれぬものと見るのが至當である。

支那の歴史を通觀すれば何れの朝に於ても人民の上に臨む官員杯は、何百年經ても同様な仕來りをして居るのであつて、王者が特に善政を施したからと云つて其れが人民に徹底して之が爲人民が助かると云ふ譯でもなく、又特に惡政を行つたから遣り切れぬと云ふことでもない、要するに人民は王者や官員の爲政の善惡に拘らず、窮通自衛の策講を怠らないのである、即ち國家的又は爲政者側の恩惠に浴する場合が甚だ稀れであつた、従て義勇奉公とか義務義俠とかの精神や報恩の觀念杯も甚だ稀薄に出來て居るのである、故に彼等の團結や契りなるものも畢竟一時的の利害關係の下に又は團體利己遂行の爲に成立するのであつて精神的結束杯の事は極めて稀有である、而して彼等の目途は無論目

家一族一門の繁榮に在る、黄金の搾取に餘念なきこと今尙ほ毫も變りはない。

古來支那に於ては何れの朝廷時代を問はず、其財政が中央のみ膨脹し尙又其帝室の收入が著しく膨脹して來ると、何日でもそれに續ひて來るものは其朝廷の滅亡である。今最近の實例を取り清朝に就て之を見るも、同朝の最盛期とせられた乾隆帝時代に於てすら其將卒を戰陣に起たしむる爲には莫大なる恩賞を要し寛大なる處分をせねば如何にしても使へぬ様な状態となつて居つた。そして八旗綠營の大將連は概ね征伐に出掛けて歸る時には皆何れも非常な金持に成つて居たのである。それも畢竟彼等が出鱈目の報告を作つては巨額な軍費を着服するのであつた。又乾隆年間には支那全土の地租全免が四回、南方七省から北京への送米免除が二回其他江南巡幸六回此間沿道の免稅杯を併せて免稅總額二億兩に達して居るが、是等の恩典も名義の善い程人民には及んで居らぬ、斯くて尙ほ年々收入の増加が五百萬兩もあつたので、乾隆帝は自家の安全を期する爲異論を排して其一半三百萬兩を將卒の俸給増加に振り充てたのである、そ

して乾隆の末年から道光末年迄約六十年位の間に清朝は歳出増加の爲大變な衰運に向つて來た。即ち清朝の北京入り込み迄は皇族數が二千人であつたものが、道光末年には三萬餘人と成つて皇族費も亦非常に殖へて居る。清朝の初期には黄河の氾濫修工費が一回に百萬兩であつたものが、其後道光咸豐頃には一回に一千萬兩を消費して居る。然るに歳入の方では天災地變のあつた地方は當然地租の未進を生じ新開地方は厠出もせぬ有様であつたから收入が著しく減少した。但し地方に由ては天災地變があつても洪水杯のあつた時には劫て其地積の増加した様な場合もあるから、其次年以後は必ずしも收入減とは決つて居ない地方もあつたが、そこは地方の役人共が譟魔化したものである。斯くて清朝の財政も歷朝末の定例通り漸次中央膨脹を來たし、帝室の收入は却て豊富になつたのである。之は恒例收入の他に帝室には種々な收入があつた、つまり帝室が官吏より賄賂を取るのである殊に前清の西太后杯へは黄金の進物が甚だ多かつたので同后の臍繰金が何千萬兩もあつたと云ふ。

以上史述の示す所によつて之を觀るも、支那の皇室と軍隊并に一般官民なるものの相互關係や情義なるものが、如何なるものであつたかを揣摩するに難くないのである。尙又他の一面より之を觀察すれば支那に於ける黄金の魔力の如何に偉大であつたか、そして又此黄金が支那人の道義的方面を如何に支配し來つたかをも窺ひ得られるのであつて、それが今日の支那官民なるものと大差があるか、即ち昨日迄腐敗して居たものが今日忽ち新鮮なものと成り得るや、若し果して是れありとすれば新鮮化せし素質や實證を求めたいのである。即ち清朝の没落は支那に於て傳統的に繰返へされたる易姓革命の軌道と毫も差異あることなく、寧ろ自己目體の腐敗に據りて倒壞したのである。

支那の革命には種々あるけれ共上述の如く概ね支那の財政が中央許り膨脹し、尙又帝室の收入が著しく膨脹して來た場合に於て豊の上で革命が成立し、最後迄奮戦することは稀れであつた、只宋と明とは共に北方夷狄に倒されずと奮戦したのみである、最後の清朝も北方夷狄であつて之が中國の主權者の際漸く外

國との交渉が複雑となつた爲に、清朝末の支那種族の觀念は二重に作用したのであるが、同朝末期に於ける漢人の革命も強弩の末勢に乗じたものであつて他國に於て見るが如き一般國民の生活と交渉のあつた譯のものではない、而も支那の軍閥や政客は一般愚民をも煽動瞞着しつゝ、我日本を帝國主義と罵るも、今日支那軍閥間の抗争や或は彼等の對外的交渉態度こそ全く帝國主義と擧ぶ所はない、前説の如く古來支那の官民なるものは官民兩者間の利害關係が没交渉となつて居り、又等しく官界に在るものと雖も各其利己的立場を異にして居つて飽く迄も自家本位となつて居る、従て日本人の如き感激や義俠的或は報恩的情操や律義杯は今日の支那人に於て之を認むることが甚だ至難である、寧ろ當今の支那人は人情酷薄で萬事が打算的なる上に數千年來練磨されて來た其外交辭禮は頗る巧みなものであるから、我邦人が日本式要領或は歐米紳士的態度を以て彼等と折衝すれば必然土俵際で投げ付けられるのである、蓋し日本人がまさかと思ふ様なことでも先方支那人は平氣でやるからである、故に現時支那の革命

政府なるものも畢竟するに洋装したる莫連女と何ぞ擇ぶ所なしである、然るに今日列強の對支外交を見るに恰も教育のある純なる青年等が莫連女を處女扱にして居る様なものであつて、而も彼の女に心酔し競ふて其歡心を求むるに汲々として居る有様であるが、今後若し尙ほ惚れた弱味で御機嫌取れば、知らぬこと迄疑はれ莫連は倍々其度を募る次第である、親戚知友は勿論他人様の御金迄も搾取して私腹を肥したり、借金を踏倒したりする位のことは彼の女の茶飯事である、莫連女の指導には自づから方法がある、決して單純なる温情主義で善導出來得るものでない。

尙ほ支那一般住民の性情に關する我陸軍部内有數の某支那通將官の所見を紹介すれば下の通りである。

「支那の治者階級は殆んど凡て自己中心主義で民福を顧みない、偶々英明な君主が自家繁榮の手始めとして善政を布くことはあるけれ共、多くは途中で遮られ其餘惠の人民迄及ぶことは極めて稀であつた、そこで人民は唯戰亂と苛斂誅

求とに苦められつゝ四千年の永き歴史を經過して來たのである、されば人民は政府に何等の有難味を感じたことがない計りでなく、願くは政府杯云ふ煩累がなくもがなと思ふて居るのである、即ち日出てて作し日入りて息ふ井を鑿て飲み田を耕して食ふ、帝力何ぞ我に有らんやと云ふ煩累のない無爲政治と云ふものが彼等の理想となつたのである、尤も堯時代にこんな文句があつたか夫れとも、宋末元初の人曾先之の作爲に係はるかは知らないけれ共、假りに之が曾先之の作爲に係はるものとしても、少くも元時代の支那人の政治觀念が茲に在つたものであると云ひ得らると思ふ、否此觀念は今尙ほ被治者級の理想なのである、斯くの如く人民は寧ろ無政府の安樂境を望んで居るのであるが、如何せん人民を喰物にして自家の繁榮を圖らんとする野心家が絶へ間なく現はれて來て政府を作る、之が爲めに戰亂は常に絶へず人民の生命と財産とは丸で雨晒しである、されば人民としては自己の生命財産は自ら擁護しなくてはならないことになり、茲に家權制度を興し（周以前）血族多數相集つて家を衛ることとし、

家屋に防備を施し圍壁に銃眼を穿ち武器を貯へ壯丁を養ひ以て自ら堅くし、尙之れ丈けでは大きな方に抵抗することが出来ないから、治者階級に對しては如何なる苛斂誅求に遇ふても敢て不平を言はず、其更迭に際しても敢て不平を唱へず、又其の後繼者の人物性行人種等の如何に拘らず所謂簞食畫漿して之を迎へ、又官治の及ばざる邊境地方などでは馬賊に付け届けをして其保護を受くる等有らゆる方法手段を盡して自家防衛に腐心して居るのである。されば被治者階級の僞らざる心理を赤裸々に洗て見るならば、理想の無爲政治は及びもないとしてもせめて支那全體が關東洲の如く上海の如く安全な棲息地になつて欲しいのである。而して生活さへ安全であれば道路などは泥濘車軸を没する底のもので良い、衛生設備や學校等はなくとも構はないから租税の極めて少い政治を布て貰ひたいのである、統治者などは異種族であらうと何であらうと構はぬのである。

支那民族性の特徴中に自己保存の必要から生れた、環境利用性なるものが根

強く存在して居る事實を見通してはならない、支那民族は四千年來絶へ間なく繼續して居る戦亂の裡に發展膨脹を遂げたのである、若しも彼等が戦亂の起る度毎に避難して居食を爲し、戦亂が終れば家に歸つて家業に従事すると云ふ様なことをして居つたならば、民族は殆んど餓死して仕舞つて、とても今日の様な發展膨脹を來すことは出来なかつたのである、四圍の環境が此通であつたから支那民族は例へは自分の村が戰場になつたからと云ふて其都度全部他に避難すると云ふ譯には往かない、否一日も徒食して居る譯に往かない自己の村が戰場になつたならば、此戦争を利用して衣食を計り或は金儲けをすることが必要なのである、そして自分の村が戰場となると見れば倏忽の間に目星しき家財を取り纏め老幼婦女と共に避難させ、壯者は家の留守番をなし彈の雨が未だ收まらざるに、早くも戰場に駆け付けて遺棄せられたる小銃彈藥は勿論死者傷者の被服裝具其他の所持品を掠奪して不時の利得を收むることを忘れないのである、又或は屋臺を昇いで第一線に出て兵卒相手に食物其他零細な物品を販賣し



て利を漁ること。恰も我國の緣日商人の心理に異ならないのである。此の如き環境利用性なるものは支那民族の生存上極めて吃緊なものであるから、此四千年來非常な發達を來し殆んど第二の天性として、凡そ自己の身邊に起る新事象新題目は何であらうとも之を自己に利する様になつたのである。彼の年々出稼する苦力が日々味爽より深更に及ぶ迄、營々として二、三十年も働き續け而も尙ほ千圓の貯蓄をすることが六ヶ敷い有様であるのに、南方の糾察隊に加つて居る者はどうか、彼等は美名の下に公然良民から金品を沒收して遂に樂な生活をなし、且不義の利得を貪つて居るでないか、又北方では外國迄留學して來た相當の智識を持つて居る者でも容易に衣食の途を求めかねて居るのに、南方では一、二年前に廣東の軍事政治學校を僅か六ヶ月の修學で卒業したものが、既に陸軍少將の階級に進んで羽振りを利用して居るではないか、共產主義、三民主義、革命運動など云ふ新しき題目の齎らす御利益は誠に大なるものである。利己本位の支那人が何とて之を見遁すであらうか。

序でながら支那の獨立領土保全或は日支親善共存共榮杯云ふ我國歴代の對支政策の看板は、之を日本側から見れば意義もあり必要もあるのであるが、之を支那人側から見れば他所事の様な感じがするのである。日本の識者は支那人に遇ふと此常套語を熱心に繰り返へす弊がある。所が相手の支那人に取ては支那だの國家杯云ふことは全く無意味な事であつて、心中甚だくすぐつたい心持がするのである。而かも流石に社交に巧みで且つ悠長な性質を持つた彼等支那人は、眞面目な顔で之に相槌を打つて相手を喜ばせて居る計りか、中には日本人と見れば進んで先手を打つて來るものがある。之れは支那人の伶俐な所であつてこうして置けば決して損にはならないのである。従て支那には國論とか輿論とか云ふ様なものはない。之が支那の輿論と稱して騒ぎ廻はるのは僅少なる野心政治家軍閥官商政商及青年學徒（其大部分は官員候補者）位なものである。そして是等官匪學匪の性情に就ては曩に述べた通りである。」

三民主義の案出に就ては、支那革命運動の功勞者にして識見高邁、志操堅確

日本が滿蒙に政治的野心は持たないと聲明した所で、支那側がそれを信じて我經濟的發展を歓迎したり、或は之を黙視する様な事は斷じてないのである。

支那の排日排貨の動機や口實は曩に述べた通りであるが、爰に支那人の一特性として附言し置くべき肝要な事柄がある。即ち彼等は強剛なるものに對しては常に羊の如く従順であるが、弱者と見れば之に臨むに暴君の如く強い傾向の存する事である。

由來支那の軍閥政客が我軍部を懼るゝ事は我一般邦人の想像以上に在る、之れが一例を示せば曾て張作霖時代に於て、我關東長官や滿鐵社長が奉天に作霖を訪問しても其の答禮には常に代理を以てしたが、關東軍司令官が彼を訪問すると必ず彼自から答訪するのであつた。又同地に於て關東長官や滿鐵社長が支那側を招待する場合、常に相當の欠席者は之れを免れなかつたけれども、軍司令官が招待するとなると支那側は殆んど全部擧つて之に應招出席するのが恒例となつて居たのである。又交渉にしても軍部が直接にやると、支那側は我要求

を率直に應諾する場合は甚だ多いのである、斯かる事實は以て支那側が如何に我軍部を恐れて居るかが首肯し得られるのである、之れが原因は種々あるけれども、要するに不正不義を働く弱者は強き正しきものを恐れると云ふ一言を以て盡きるのである、然るに我外交官は甚だ正直ではあるが強くない爲めに、常に彼等に愚弄されるのである、外交術に懸けては支那側に一日の長がある、加之我外交官は威力動作を苟も外交の補助手段に善用する事を以て、外交官の恥辱なりと心得て居る位であるから、此間の消息を呑み込み居る支那側が我外交官を嚙弄するのは當然とも謂ひ得らる、故に我外交官の嚴重抗議なるものも支那側に對しては、何等の權威をなさないのである。

支那側では日本は原料不足で之を支那に仰かねはならぬと同時に、製品の販路も支那に求めなければ立ち行かないといふ風に、日本の弱點を見透した様な考へから、日貨排斥を繰返して居るのを見ても、支那人が弱味に付込む強暴なる特性が窺はれるのである、そして斯かる彼等の特性も日本の弱點も共に只今

如何とも爲し難いのであるが、我外交官が斯かる彼等の特徴を緩和する爲めに、或は之を回避せんとして彼等の御機嫌を取つたり或は萬事讓歩的な態度に出つれば、それこそ却て益々其の弱味に乗せられるのである。然らば如何にすれば好いかと云ふ事になるのであるが、從來の排日が經濟問題からでなく政治問題外交問題から出發して居るので、而もそれが恰も彼等の愛國心の發露であるかの如く粧はれて居るけれども、そうではなく不純な策動の魔手が其の背後に動いて居る事は前説に於て述べた通りである。即ち畢竟支那の排日は支那の爲政者側の暴擧に基因するものであるから之が對策の立たない筈はない、そこで日本としては先づ凡有手段を盡して支那政府又は地方官憲の、之に關する暴政の實證を擧げて彼等に迫る事が肝要である、そして之れが實行は一見容易ならざるが如きも決して不可能な事ではない、現に支那學童の教科書には排日獎勵の記事が載つて居る。又邦人に忤れた支那人中には排日策動の系統は勿論國家の秘密さへ洩らすものもあり、金の力で自由自在に動く恰好のスパイも有り

刺つて居るのであるから、支那の實情と支那人の特性に通ずれば、如上の方針と鞏固なる決心とに由つて排日豫防の策講は敢て至難としないのである。

我邦人の多くは今尙支那を人格視して居る爲に、常に失策勝である、即ち支那は其の腦神經と手足の神經とが各個別々に働いて居るから人並の動作は出来ない、人並の動作の出来ないものを強ひて道連れにし様とするから、種々な故障も起れば迷惑も蒙るのである、仍て之を矯正し指導する爲には、其本體を洞察して頭腹手足各別に適應するか如き講策施術を必要とする。

##### 五 滿蒙へ邦人の發展せざる事情

在滿邦人は之を米國其他の海外に在る邦人に比すれば餘りにも我政府や滿鐵に依頼し過ぎる、今少し獨立獨歩の精神に立歸つて奮闘せねば、滿蒙への發展は出来ないと謂ふ様な事を吾人は屢々耳にするのである、そして邦人が我滿鐵又は政府へ倚賴する傾向の存することや、海外發展の氣魄に乏しいこと抔は、吾人も亦其然るを確認するものである、乍併之を以て邦人が滿蒙へ延び得ざる

先づ彼等に經濟的援助を施し、以て其の不逞化を豫防することが得策且つ急務である。若し然らざれば軀ては共產黨か不逞鮮人團と野合すると共に、從來生活の不安に驅られ今尙糊口の途に窮しある、在滿良鮮人を煽動使嗾して之を糾合するの外、不景氣に伴ひ窮迫の状態に陥れる地方支那住民や浮浪の徒をも、之に加へて滿蒙奥地の赤化を試みることを、必ずしも杞憂とせず、蓋し今日滿蒙奥地の情勢が、漸次之に適合するが如く悪化しつつあるからである。

## ハ 支那人の詭辯欺瞞振と之に對する日本人の

### 率直振其他支那官民の性情に關する雜感

支那の官民は其實行成績の甚だ擧らざるに反して、彼等の言論文章は雄大優美であり巧妙である、従つて又芝居を打つことも上手であつて彼等軍閥政客の利己抗爭は宛然狐と狸が瞞し合して居る様な觀がある、彼等の口頭作業は恐らく世界に冠絶して居る、乍併不信義且つ忘恩的にして詭辯のみに長ずる事は亡國民共通の一特徴であつて彼等の爲に最も遺憾とするものである、只だ支那の

商人丈けは商業道徳を重んずる傾向があるけれ共それも畢竟彼等が一朝にして其信を失すれば復再び起てない事を能く承知して居るからである、然るに支那の軍閥政客の去就は大勢に順應することを自己保全の要諦として居るから晨に甲派に就くかと思へば夕に乙派に走り甲がごと提携して丙と戦ふかと思ふと間もなく乙が丙と合流して甲と争ひ、或は甲が丙と共に乙に對抗する、そして又甲乙丙各團體内に於て更に分立争鬪叛逆が行はれ、集散離合が常に頻繁に繰返へされて居るのであつて、畢竟彼等の威力動作なるものは主義節操の下に行はれるものではなく、獸的利己抗爭の爲には其手段を擇はないのであるから、商賈の場合とは全然其趣を異にして居る、先年張學良が楊宇霆を殺害する爲其直前に於て楊に油斷せしめ彼を自邸に招致した手段杯は、到底人間並の感情常識で判斷出來ない程冷酷なものであつた、斯かる状態に於て彼等軍閥は年間命懸けて譎詐權謀を之れ事として居るのである、従て武士道の餘澤に浴せし我日本人が彼等の詭辯や譎詐權謀に引懸かるのは無理もない事である、換言すれば

日本人は支那軍閥政客の芝居と支那人の舌三寸に禍されて居る、そしてそれが今尚ほ毎年繰返へされ、支那政府を背景とする一軍閥一勢力の私慾を満足せしむる爲に年々我國權國益を放棄しつゝある、殊に支那政府の役者（軍閥政客）が換れば變る度毎に、前任者の未解決案は其儘に新規なる利權回收上の要求を受けるのであるから従來の我對支方針を一變せざる以上、結局日本は支那に對する既往の權益を悉く支那へ返還せざるを得ざることとなる、而も之が爲支那自體の内容には毫も變化はないのであるから支那一般住民の不幸は増しても其福祉を増進する杯云ふ事は斷じてないのである。

日支官民の性情比較に關して爰に二、三實例を擧げて、日本人の正直さ加減を摘發して見る。

蔣介石が會て日本に滞在中特に日本人の信用を得る爲に金錢出納を極めて嚴正にやつた事がある、之が爲或日本人等は頗る感服して、有繁は支那革命の志士丈けあつて、清廉潔白なりと激賞した揚句、南支那の革命が本物なりとの宣

傳に努めた事實がある、又閩錫山が反蔣戰開始の直前に於て、對南作戰準備に腐心しつゝも尚ほ策略上表面日本へ亡命せんとする身構へを粧ふ必要上、日本の某地に借家したとて、直ぐにも閩が渡日するものと早合點抔した邦人が相等多數にあつたり、或は支那南北を一寸旅行すると支那官員政客の歡待や御世辭に陶酔して、最早支那の事は乃公出ですんばと云ふ様な氣持になつて見たり、或は我某大官にして近來支那政府（蔣介石、王正廷等）が誠心誠意を以て嚴重に排日の取締をする様になつたとか、南方支那人が非常に親日的になつて來たとか云ふ様な事を能く公言するものがある、元來是等の日本人は支那の實情を能く知つて居つて尚ほ斯かる事を政略的に云ふのか、それとも實際云ふが儘に支那に關する頭が單簡であるのか判明しないけれ共、支那の事情に疎い多くの邦人を過まらすから斯様な謬見的な言葉は成るべく慎んで貰ひ度ものである。

先年支那側が條約を無視して打通線を敷設した場合に於て我より抗議したけれども該線が軍用上必要であるからと稱して其敷設を敢行したり、又支那側は

京奉、奉海兩線の連絡を計る爲に、只一片の通告に由て滿鐵幹線のクロスを斷行し、爾後之に關する申譯には北京方面への武器の賣込の爲、奉天兵器廠と連絡する必要があるからと稱して我抗議を有耶無耶に葬つて了つたのである、又昭和四年の秋京都で開かれた太平洋會議の席上に於て、支那側代表は在滿日本官憲が常に支那人を壓迫すると述べて居るが、事實は正に反對傾向に在る、少く共彼我の壓迫事件を相殺して見たならば、滿蒙奧地に於ける支那官憲の日鮮人に對する壓迫は到底比較にならぬであらう、尤も奉天の如き滿鐵附屬地内の大都市に於てさへ白晝尙ほ公然賊團侵入し銃火を交ゆること稀有とせざるのみならず、元來支那では賊團が軍隊へ編入されたり、軍隊が賊團に轉化したり、其他文官の任免黜陟等も著しく不規律且つ頻繁に行はるゝ關係上、支那市街と其境界を接觸しある滿鐵附屬地内非常警備の際、之に出入する支那人特に官服を纏はざる支那官員の階級識別は頗る困難なるを以て、百に一つの過誤が我警察官仲間にないとは斷言出來ない、そして支那側は斯かる稀有の實例や過失を

以て、我在滿官憲の支那人に對する態度が横暴とか壓制とか云ふ様な非難を持掛けるのである、少くも太平洋會議に於ける支那側代表の斯かる主張は支那地方官の誇大な報告資料を基調としたものであらう、そして其後に於て某支那人が此種の問題二、三の實例を擧げて我某大官へ哀訴に及んだものか我某大官は直に我出先の官憲へ一般戒飭的訓令を發したり、終には我奧地駐在警官派出所の看板や名刺迄も御廢しと云ふことになつたり杯した事實がある。

在滿鮮人が某地に水田を拓いた爲に、其隣接地の支那畑に浸水せしめたとして支那側から之を日本側へ訴へて來ると、邦人中には斯かる僅少なる一、二の實例を楯に滿蒙に於ける鮮人の水田經營を非難する様なものもあつた、乍併鮮人の水稻栽培に對しては、支那地主が概ね之を歓迎し之に満足して居るのが事實であつて、上述の非難は支那官憲が我在滿鮮人排斥の爲にする一種の口實に過ぎないのであるが、それを眞に受けて支那側の攻撃に共鳴する邦人こそ、野暮の骨頂にて支那側の番犬にも等しいものである。

日本人は能く支那の輿論がどうか、支那の感情を損ねるとか云ふ様な事を云ふけれ共、本來支那には輿論はない、支那の輿論や排日なるものは、概ね官製か然らざれば官商政商等の思惑ある一部野心家等の官憲に對する協同合作に由て成立したものであつて、學生並に排日職業屋等の事は既に前説にも述べた通りである。又支那の新聞とか雑誌杯云ふものも、其言論は嚴重に束縛されて居るのであるから、支那の新聞や雑誌の論説を以て支那の輿論と見做す事は無論出来ない、又支那の感情と云つて見た所でそれは支那政府なるものを其背景とする支那の一軍閥勢力の利己的な打算から割出された感情であつて、それを以て支那全體の代表的感情と見る譯には行かない、故に支那の輿論とか感情杯云ふものが今日あり得る筈がない。

支那や滿蒙に於ける邦人の經營に係はる言論機關は、支那四億民衆を代理して支那の秕政を批判矯正し以て多少に拘らず、支那の發育指導上有要有意義なるものであるが、自國秕政の襁褓隠しをやる支那官憲の口車に載せられて、順

天時報杯を撤廢せしめたる我當局の眞意が那邊に在るかを疑はざるを得ない。

支那に於ける外國租界は支那軍閥政客の失脚した場合の避難場所であること丈は周知の事實であるが、今回の漢口租界回收問題の如きも南京政府が之を回收せんとするのは、只單に國權回收とか若くは支那外交當局者の賣名の爲からのみではない、今一つは其反對派亡命客の逃げ場を逐次消滅せしめて現南京軍閥一派の安泰を計らんとすからでもあらう。

間島事件の後始末は如何になつたか、又今後如何にして同地方在住邦鮮人四十萬の生命財産を庇護せんとするか、依然として支那警察軍隊の力に信頼せんとするが如き事あらば、大正八年以降の慘禍は今後とても屢々繰返へされるであらう。

支那人は口頭作業に巧みであるがそれが當にならぬと同時に條約や證文や執照杯も當にはならぬ、例へば三矢協定中には態々支那官憲が誠意を以て不逞鮮人の取締に當ると云ふ様な事が書かれてあると、それによつて我官憲は其責任を

解除されたかの如くすつかり安堵の思をして見たり、或は土地買収に當り執照（地券）を握ればそれで以つて土地の権利が確實に得られたかの様に思ひ込んだりするものが多いけれ共それで安堵して居たら大間違である。

今日の支那官憲には條約履行の嚴正な義務心もなければ責任觀念にも乏しい、加之彼等の不法行爲に對しては何等の制裁がないから文書に調印された條約も抗議も共に紙屑同様に取扱はれるのである、従て彼等が口頭約束や聲明を裏切る位の事は彼等の茶番事となつて居る、つまり二重人格三重人格の使ひ分けが殆んど常習的となつて居る、殊に彼等は支那政府と云ふ背景の下に諸外國の對支弱味に乘じ、そして利己的な打算に由て其目的を達成する爲には手段を擇はず我儘のしたい放題を働くのであるから、到底正直なる我外交官が彼等と太刀打出来る筈がないのである。

凡そ弱者が正當なる強者に打勝つ爲には俗に所謂瞞し打ちする戦法以外に道はないのである、故に今日の對支外交に於て日本が敗北する事も畢竟日本人が

今尙先方を知らずに人情負して居るのである、即ち獸的傾向の存する支那官匪を眞人間として取扱ふから常に敗北するのである、我軍部に於ても從來屬々張作霖を援けたそうであるが、何等得る所なく遂に作霖等の無誠意に愛想を盡かした様であつた、是等の事も畢竟彼等支那官匪が義理人情で動くと思ふた事が最初から見當違であつた、即ち當初彼等が交換條件を提示して其援助を求めて來た場合、其機を逸せず即座に之を實行せしめ置くべきであつた、然るに先づ彼等に恩を施して置いて之に對する御恩報謝を其將來に豫期するが如き日本普通並な遣り方で往けば必ず虻蜂取らずに了るのである、最近の我對支外交振りも略之に類似の觀を呈しつつある、先方は今日其四圍の情勢上譎詐權謀に包まれて居るのであるから自己保全と私慾遂行の爲には信義とか禮節杯考慮する邊がないのである。

尙ほ支那官民の性情に關する體驗上二、三の氣付を述べて見ると下の通りである。



自動車の操縦振りが如何に大膽であり無鐵砲であるかは乗車せし邦人をしてひやくさせられたことは獨り吾人の體驗のみではあるまい。又一、兩年前東支鐵道問題に依り露支交戦の際支那兵が露西亞婦人の指から一リングを抜き取る爲に婦人の指を切斷した事實がある、我邦人は是等の事實を如何に見るか。

- (4) 一般文明國に於ては條約の違反は相當重大視するが支那の官憲は平氣でそれを遣る癖があり、又之に關する抗議杯も今日では餘り苦にもしなくなつた、殊に民間の契約違反や事故に關聯する抗議杯は屁とも思はぬ様になつて居る、彼等官憲は自國が外國から殴り付けられる迄は動かぬ様なずるい遣り方を心懸けて居る、從て地方的の問題では却々腰が強い結局日本人が殴られ損の場合が年間繰り返へされて居る、奧地に在留する一般邦鮮人は勿論我奧地駐在武官の發送した情報や報告が無斷で彼等に開封される場合があつても其儘泣き寝入りの状態に在る、先方は我抗議を無視する癖に對外的には人並な抗議

をする殊に横に車を押す場合が甚だ多い、是も畢竟横車式抗議が幾分にも奏功すればそれ丈對内的には自己の立場が有利になるし、又假令物に成らぬとしても別に殴られる譯でもない又損することもないから、對日抗議や排日や利權の回收呼はりには彼等の對内的人氣取政策としての常用手段となつたのである。

- (5) 年間支那軍閥に蹂躪されて居る支那一般の住民は確かに同情に値するものがある、乍併支那の住民に同情するの餘り之を以て直に支那官民兩者を混同して其の全體に同情を表し終始濫情主義を以て支那官匪を網羅せる所謂支那政府なるものを遇する事は果して如何かなものであるか、決して適切妥當なる方針とは謂へないのである、蓋し支那政府なるものは畢竟支那の一軍閥一勢力の傀儡であつて之を一般支那住民より見れば良民を惱ます一種の鬼門であるからである、然らば今假りに現存軍閥や官匪醜類の徒は漸次之を更新して之に換ゆるに民間善良の分子を以てしたら、普通並に有要なる政府を組織し

得られるかと謂ふにそれは支那人の自力を以てしては到底出来ない藝當である、何んとなれば前説の如く支那人は公人としても極端な利己主義が固疾と成つて終始着き纏ふて居るからであつて、支那普通の住民と雖も結局同穴の狐であるから彼等も一朝にして官途に就き公人となれば、同一の軌道を辿り利己抗争や内訌の起ることは必然の情勢に在るからである。

- (6) 今日支那人は之を一面から見れば野生的に出来て居る共謂へるが純でない、甚だ不純であつて且つ餘りに奸智に長けて居る、故に彼等に對して溫情主義や正直な外交や又は之と反對に姑息な權謀をやれば却てそれを利用して結局味方が負けるのである、仍て支那人を善導し且つ其責務を履行せしむる爲には金と力に待つ以外には斷じて良方途はない、或論者は支那に對する内政干渉と支那の發育とは全く別個な問題なりと謂ふも支那は自力を以て發育する能力を缺いて居る實情に在るから、今後之を放任すれば支那自國一般住民の不幸は勿論近所近邊にも倍々多大な迷惑を懸けた揚句結局自滅する外仕方

がないのである、仍て支那は今後他力本願で進むことが支那自體の發育上賢明なる行き方である、之が爲時々外人間に於て支那に對する共同管理論の擡頭するのも無理からぬことである、即ち共管論は對支人道主義の第一歩共見得られるのである、共管論の可否は別として滿蒙だけは之を一般支那と切り脱つて局部的に解決するのが滿蒙在住民救済の捷徑であり又我既得權行使上にも適切な對策であると思ふ。

我日本は支那の實情にも支那人の性情にも味い或る外交官の見當違ひの爲めに、支那の一軍閥勢力詐僞師團に引懸つて、滿蒙や支那に於ける我貴重なる國權國益を片つ端から放棄し或は侵害されつつある、そして之に對する代償は毫も得られないのみならず、之が爲め對支懸案は次から次へと年々増加して行くばかりであるから、日本國家并に國民として此位迷惑至極な事はあるまい、仍て支那の事情に疎い爲めに、年間支那の官憲なるものに齷弄せられて、日本國家并に國民に多大なる迷惑を懸けつつある某外交官等は、もう大概にして兜を

脱いだらどうかと思ふ。

## 九 結 論

支那官民の性情は以上各種の問題に就て吾人の主張したる各要點を綜合し、翫味する事に由て大略其意義が盡されて居るものと思ふ。そして今日支那の統一なり發育なりが遅々として振はないのは、支那人の教育が後れて居るとか學識が足りないとか云ふ様な事のみではない、其最大原因とも見做すべきものは無論道義的方面の缺陷に在る、之が爲支那の革命戰なるものも畢竟軍閥政客の私慾鬭争に過ぎない、又一時望を囑せられて居つた所謂新人連も私慾の結晶であること毫も舊軍閥政治家と變りのない事も遺憾なく曝露されて居る、そして彼等が利己抗爭する爲にはそこに何等かの口實がなくてはならない、之れが爲人氣に投ずる様な種々様々な看板や標幟が現はれて來るのであつて、三民主義も共產主義も共に此種の目的に利用されつゝあるのであるけれども、それが支那の實情にも支那民族の性情にも當筈らない、極めて架空的なものである、尙

今後とても支那の國家建設と云ふ好題目の下には如何なる主義主張が彼等の間に提唱されるかも知れないけれども、それが唱導されたからとて之に伴ふ彼等の實行能力が甚だ疑はしいものであるから其實現は甚だ至難である、隨て吾人は彼等の雄大優美なる言論文章や其欺瞞的な怒號や聲明を不當に重視するの愚を避けて、飽迄も警戒自衛の方途を講じなければならない。

邦人論者中には往々にして、我維新事業の過程を支那の現状と比較して支那の前途に望を囑するものがある、而し此事は前説にも述べた通り、武士道で鍛鍊されて來た揚句の日本人が、維新革命に、成功したからと云つて、黄金萬能、利己至上主義で譎詐權謀を事として來た支那人にも、必ずしも近代的國家建設の事業が奏功するものとは限るまい、今日若い支那人が劃策して居る問題は多種多様である、乍併中央と地方とを問はず、彼等の提唱宣傳する題目美名の下に公共的施設や國家的事業が、從來果して如何なる程度迄遂行されたか、又此種事業の成績の擧げざる原因が何んであるかは、苟も支那の實情に疎からざる

ものの等しく熟知しある所である。故に吾人は我日本人が支那人の言論文章に眩惑したり、又は其の欺瞞的な措置や粉飾に誤魔化されてはならない事を、此所にも繰り返へし置くものである。

盜賊稼業に従事する滿洲馬賊等の申分を聽取して見ても、三分は愚か五分も六分もの理が充分彼等にあることを發見し得る、殊に彼等匪賊中には當初罪もない彼等の妻子眷族が曾て食禁飽くなき支那官憲への賄賂費がない爲めに死刑其他過酷な罪科に處せられ、或は正しき道を履まんとして、却て強慾なる官憲の災厄を被る忤した事が、彼等をして匪賊の群に投げしむるの動機となつて居るものも鮮くない關係上、彼等は支那國內に於ける彼等の匪賊稼業を毫も恥とせざるのみならず、寧ろ官職や國法を種に不淨蓄財に精進する支那官憲よりも却て優れりとなして居る。況んや彼等は匪賊と呼ばれ國賊と罵られても、一朝にして風雲に乗ずれば忽ちにして將帥の班に列して國政の樞機に參與し得られるものもあり、従て此種の團體が廣大なる支那國內隨所に繁殖し跳梁跋扈を極

むること毫も不思議とせぬ。

支那官民全數中より官員軍隊、學生及匪賊等凡ゆる有害なる分子を取り去つた残りのものが、支那一般住民の主要部分を占むる筈ではあるが、此部類に屬するものの中には尙官憲と通謀して不淨蓄財に餘念のないもの、即ち官商政商或は不正業者等の不純ものが相當多數に居る、そして更に此種不純分子の引去殘なる商工農等其他各種の生業に従事するものこそ、眞に支那住民の中堅分子とも稱すべきではあるけれども、不幸にして彼等は政治的には去勢されて居つて全く無能力者と化して居る、而も此去勢を回復せしむる爲には、去勢を施したる支那國內の軍閥官員政客等の力に信賴することの無理なるは勿論、彼等去勢施術者をして、一般支那民衆に對する去勢回復の氣分に轉向さす事すら甚だ困難である、換言すれば此種の施術は支那自力に期待を懷く譯には行かない、即ち他方の應援を必要とするのである。

目下の支那は蔣、張兩軍閥の握手に由て一時的小康が保たれて居るけれども、

それは彼等相互間の利害關係が然らしむるのであるから、何人も之に由て支那が統一され軍閥の抗争が終息したものと見るものはあるまい、殊に支那の統制秩序が回復すると云ふ様な事は却々容易な事ではない、蓋し曩にも述べた通り支那政府と云つても單にそれは支那國內の一軍閥勢力の傀儡に過ぎないのであるから、該政府の命令が各省各地方に迄も及ぶと云ふ事は頗る至難な事であるからである、そして之が爲支那一般の住民と云ふものは不絶僅少なる軍閥官員政客等の私利私闘の爲めに蹂躪され、年々莫大なる慘禍を被りつゝある、即ち軍閥の抗争が起れば、酸鼻極まる社會的混亂が起り、野獸よりも劣れる同族殺傷が行はれ、全國に亘る莫大なる天産物は開發されず、對外貿易は犠牲にされるのである、又禍を蒙るものは獨り支那の住民のみではない諸外國并に其國民の損害も亦多大なものがある、即ち對外條約の無視、外人に對する侮辱殺傷其他の迫害事件は頻發し、之に加ふるに支那人の購買力や生産力は減退し、交通は不便となり、労働者は悪化する杯に依り如何なる事も、直接間接に其惡影響

を受けないものはない有様である。歐亞大陸の四分の一に相當する廣大なる地表と之に包容する四億の住民が何日迄も斯かる状態に置かれある事は、果して人道上之を許容すべきであらうか。

吾人は概説の項にも述べた通り、支那を一家に譬ふれば其家長なるものは頗る不正當なものである上に、甚だ放肆極まるものである爲に其家族は勿論近所隣り迄も多大な迷惑を懸けつゝあるものであるから、其家族と協同して之を懲戒しつゝ指導すべきである、之が爲斯かる放蕩漢莫連女に對しては嚴正なる態度を必要とする、然るに其家族は永年の慣習上全く無力である上に終始其家長に欺瞞されつゝあり、又其近隣者も之を指導すべく餘りに寛容に失する爲に家長の莫連は倍々其度を募りつゝある状態にある。

吾人の主張は大要如上の比喩に由て盡されて居ると思ふ、仍て支那と最も緊密なる關係に在る隣邦日本は諸外國に率先して支那の救済に當り支那四億民衆の解放に助力すべきである、之が手段としては支那國內の一軍閥勢力に過ぎな

い所謂支那政府なるものに對しては、國際義務を強制的にも履行せしむること、支那の排外的國民教育や排日の暴政に就ては、豫め有要機關を設けて之が系統内容の探查に努め、其實證を擧げて支那官憲の反省を求むること、又之が爲要すれば痛要適切なる手段を取ることに、我言論機關（邦人經營の漢字新聞）を支那や滿洲の各要地に設けて、支那の間接指導に當らしむると共に、支那の實情や支那民族の性情は努めて之を世界列強に紹介し、以て我政府の對支態度の嚴正公平なる事由を宣傳すること等は其主要なるものである。

次に滿蒙は日鮮滿蒙四種族の協同世帯であり、又日本人が滿蒙へ延びると云ふ事は上記民族等が毫も迷惑せざるのみならず、却て彼等の福祉を増進し日本の恩惠餘澤を蒙りつゝあると云ふ事實が既往に於て立證されて居る以上、日本人の滿蒙への發展は當然過る事である、而して今假りに日本が支那全體を世話する資格がないとしても、滿蒙丈は之を世話する十二分の資格を持つて居るのであるから、滿蒙は之を支那一般の領土と混同して、彼等軍閥官匪の我儘勝手

に放任する譯には行かない又之と同様なる意味に於て今假りに滿蒙人にして斯かる吾人の提唱する人道主義に共鳴して、眞に滿蒙をして保境安民の樂土と化せしむるの理想の下に、蹶起せんとするものあらば、須らく日本は之に對して援助を吝むべきでないことは勿論、寧ろ進んで之に助力を與へ以てその目的を達成せしむるに努むべきである。

世界領土の分配が不均衡不公平であつた爲に、歐洲戰亂が起り、不幸にして不平不滿なりし獨逸が戰敗の浮身を見たるが爲に、世界の領土は依然として不均衡の儘に繼承されて居る、そしてそれを機會に世界の列強は自己の掩有する膨大なる領土を強ひて保全せんとして腐心しつゝあるのが當今世界の實情である、然るに彼等列強の事情と正反對的なる我日本が列強の欺瞞的なる勸誘主張に順應して彼等との協調主義を捧持し行かば、早晚其自滅を招くこと當然とも見得べき事情がある、隨て滿蒙に關する條約は武力に由て締結したものであるからとか、或は時代後れの古物であるから之を放棄して新興支那に同情すべき

である。抔云ふ様な主張を懐く日本人は、先づ世界の情勢なり支那の實情なりを正視したる後口を開くべきである、そんな單純な頭でそして又歐米人の權謀や支那人の詭辯に載せられて我對支對滿の貴重なる國權國益を片つ端から放棄する事に努められては堪まつたものではない、況んやそれが支那住民の幸福にも利益にもならないことは、曩にも縷々述べた通りである。

以上述べ來れる吾人の主張は正當であり、正義である以上之れに對しては列強特に米國と雖も之に干渉する事は出來ない筈である、元來米國は人道主義を標榜し支那の門戶開放機會均等主義を絶叫して居るけれども、曾ては支那關係の問題に於ても其の表看板と矛盾した事實があつた、況んや吾人の主張は對支人道主義から出發して居るのであるから之が實現上俯仰天地に恥ないと同時に何れの國何れの民族へも遠慮御無用なりと堅く信するものである。

## 餘 論

幣原外交の缺陷は對支認識の誤謬に歸着するものである、故に之を矯正する爲めには幣原氏の對支觀念の根本的建直しを必要とする、即ち幣原外交が今日迄支那國內の一軍閥勢力に施したる恩惠は洵に莫大なるものであるが、それが悉く日本并に日本國民の損害である事は勿論、幣原氏の誤られたる對支義俠觀念通りに支那一般住民の幸福ともなつて居ない、然るに幣原外交は支那の一軍閥團體の傀儡たる支那政府なるもの、御機嫌を取る爲めに、諸種の便宜を施した事は好いとしても、支那問題に對する措置が終始甚だ寛大に失し、讓歩に讓歩を重ねて居る事は頗る鮮明なる事實であるが、それが俗に謂ふ所の幫間の度量とか、又は宋襄の仁とでも稱すべきものであつて、斯かる觀念の下に對支外交なり對支指導なりをやらうとする事が大なる錯誤である、

支那の軍閥政客は三民主義を骨抜きにして、之を利己遂行の要具に利用しつゝあるものであるから、彼等の詭辯や粉飾に迷はされてはならない、即ち彼等